

景観系設計モデル

- 街の生態系に組み込まれる建築景観設計の提案 -

街の顔としての大きな建築だが、身体性を持って展開する。
大きな建築が街の景観に参加する新たな手法の提案



00 はじめに 街の生態系から建築を捉えなおす

景観は日々、変化し動いている。建築もその大きな変化の一部であり、街の蓄積として新たな形を捉えたい。
街というのは私たちの暮らしの上でアイデンティティの一つであり、コミュニティ形成に欠かせない単位だ。しかし、いざ建築を作ろうとしたとき、それは街（つまり私達の暮らしに関わるアイデンティティ）は建物の外にある体験である。建築から街を考えるのではなく、今ある街のルールから建築をつくることで、建築が景観に参加し、建築づくりは街づくりに繋がるのではないだろうか。

01-01 景観を現象として考える



周囲があって初めてその木はどんな木なのか判断することができる

私たちの身の回りには景観は、自立しているように見えても、周囲との関係によって定義づけられている。例えば、一つの木が、周囲の低い木やそびえる森があってはじめて、その木は何かとすることができるように、私たちの認識はいつも、一つのものを捉えているのではなく、周囲との関係によってはじめて成り立つものである。

建築も景観を作っている一要素であるが、その場所と建ち上がる物質との間がどのように結びついているかは考えられていない。景観を考える上ではその結びつきを考えねばならない。

01-02 近年の景観への取り組みについて

建築外での景観の研究

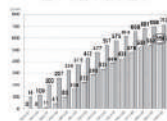


地域らしさとしての景観は「読むべきもの」が、読めばあり方で、あるべきところにある状態」が地域らしさであり、概念的なスペースではなく人が実際に使う場としてのスペースが重要だと結んでいる。



文化に関わる現象を扱う文化地理学の分野において議論が深められてきた。場所という現象に対して個人や集団による観験の分野が行われている。

近年の街の取り組み



47都道府県 1778市町村の中で景観行政条例の数は713となるとともに、景観計画制定市町村の数は558となり、全体の3割を超え今後も増えていくことが予想される。



未来大事な人の場としての景観形成と結びつきにくい

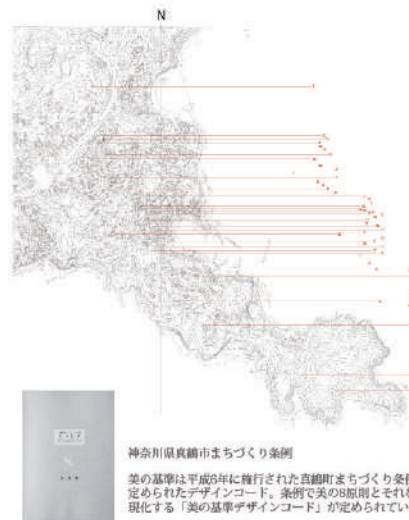
景観についての概念は、建築外では現象学、地理学、景観工学と多くの研究がなされている。

また、近年では、地域の個性や生活環境と密接に関わる景観を残すという気運が高まり活動が活発化してきている。しかし、今規定されている多くの景観条例は色や素材の指定のみがされている例が多く、人のための場に結びついていない。

近年の景観工学や文化的景観の分野では、景観は「人とその周囲の環境の相互作用の現れ」であり、常に変化し続ける『生きた資料』と考えられている。それは個人の風景という恣意的な認識だけではない。

今回は、この相互作用に着目して、街の景観の研究の延長にある建築においても、街の人の場としての景観形成を提案することを目的とする。

02-01 調査事例



神奈川県真鶴町まちづくり条例

条例の基準は平成6年に施行された真鶴町まちづくり条例で定められたデザインコード。条例で美的8原則とそれを具現化する「美的基準デザインコード」が定められている。



街の在り方と共に景観の在り方を模索する事例として景観法を活用するためにいち早く、「景観行政団体」になった、神奈川県真鶴町にて街の人に聞き取り調査等を行った。1987年リゾート法の制定により、真鶴町でもマンション開発が行われる。その際にまちづくり条例が制定され、施行されてから25年経つ街である。現在もこの条例が守られ続けている中で、街全体を規定している条例の視点から、実際の街と比べどのようなあり方があるかを観察した。

実際の景観への取り組みを分析

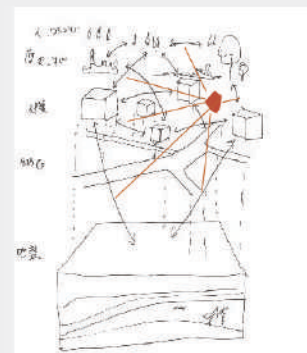
- ①相互の連関の関係について定義されている。
- ②都市を構成する大から小スケールのオブジェクトを等価に扱っている。
- ③表れる景観をエリアとして考えている。
- ④人にまで結果が結露づけられている。これらの特徴は景観の本家の特性であり、真鶴以外でも適用できると考える。

02-02 調査分析 街構成の分析

調査した事例は、もともとそこに景観の価値をもった場であり、人のコミュニティから建築、建築から地盤へと大きな矢印をもって、過去から繋がり、全体の見えとしてその地域特有の生活や景観をもっていた。しかし今、私たちの暮らしの身の回りの景観は、生活が土地から自由になり、建築はどこでも同じ技術をもってつくられるようになる。結果、大きな矢印が失われ、個々がバラバラの見えとなっていつている状態である。



街の大きな矢印と小さな矢印



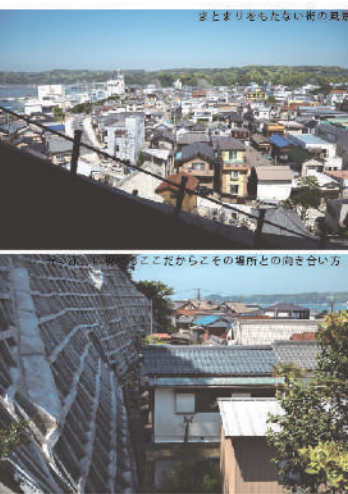
街の大きな矢印と小さな矢印

図はノルウェー・クレンゲフの住宅空間の分析による景観形成を参考にした

しかし、そうした一見バラバラに見える状態にも小さな矢印として周囲と関係づくことで現れるその場所だからこそその固有の特徴があるはずだ。そして、バラバラに見える街こそ、これからのありようを考えるべきではないのか。

そして、新しく建築が建つとき、建築のみで自立するのではなく、部分の矢印とつなぎあわせることで、建築が建つと同時にその街だからこそその景観形成につながるのではと考える。

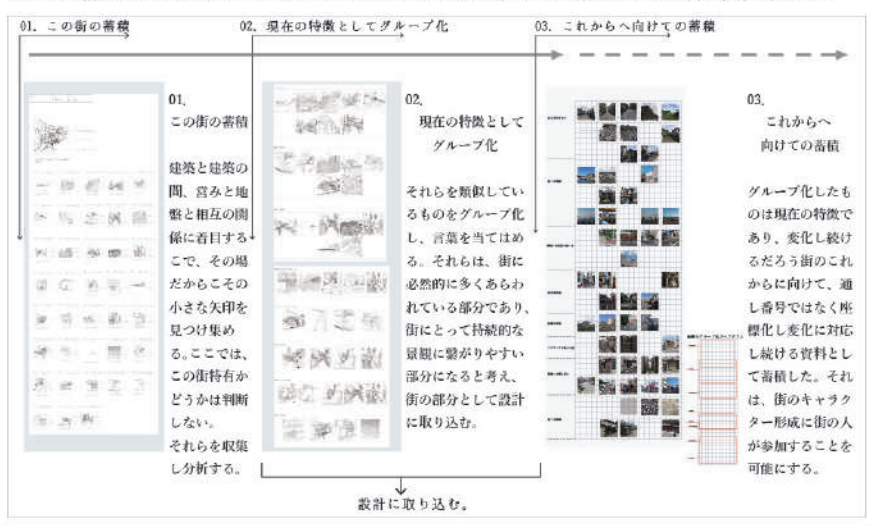
03 敷地 これから変化する街



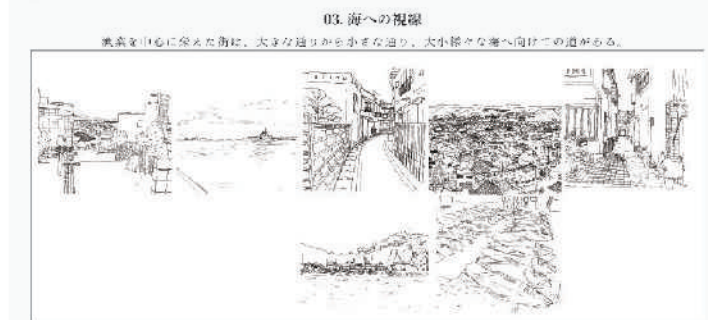
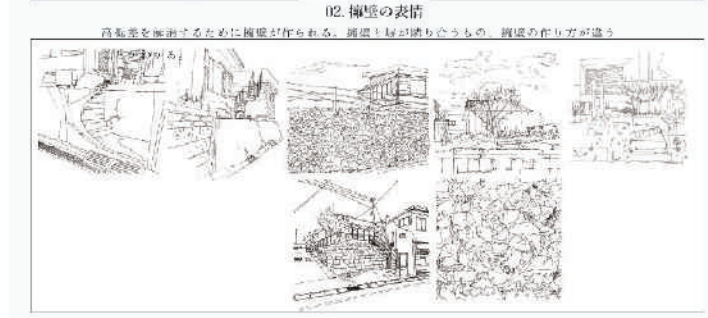
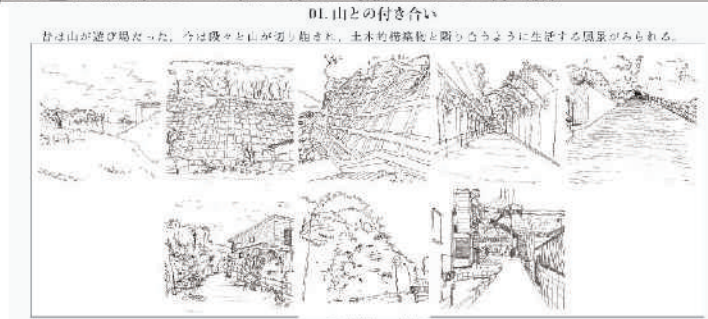
まどまりをもたない街の風景
敷地 千葉県勝浦市。
景観形成の取り組みが大きく行われていない、しかし今後も持続していきだろう街を選定した。
漁業を生業としてきた暮らしから、産業構造がかわりつつある。一見ちぐはぐでバラバラな風景にも、都市構造レイヤーを横断した相互作用に着目してこの街だからこその体験としての特徴を浮き彫りにする。
街の部分に着目し収集することで、街のキャラクターを再認識し、設計に取り込むことで内在的だった街のキャラクターを表出させる。

03-01 敷地調査 街の景観を蓄積し生態系へ

街の部分の読み取りをするだけでなく、グループ化を行うことで、この場所として持続する可能性の高い景観を導き出す。



03-03 小さな矢印のグループ化から得られた勝浦だからこその街の部分



04 プログラム 街の心臓部の建て替え

勝浦生命館 1960年 501㎡
勝浦図書館 1953年 435.67㎡
建設面積 940㎡
木造2階建て 一部鉄骨造

市街地中心部、公共施設で唯一の機会。社会教育施設、小児・乳幼児の利用スペース及び読書スペースがない。

街の心臓部ともいえる図書館と集会所が老朽化により建て替わろうとしている。
街に必要な機能だが、小さな集落には大きすぎる建物でありそのままでは、街でみつけた街のインタラクションとつながるには違和感がある。



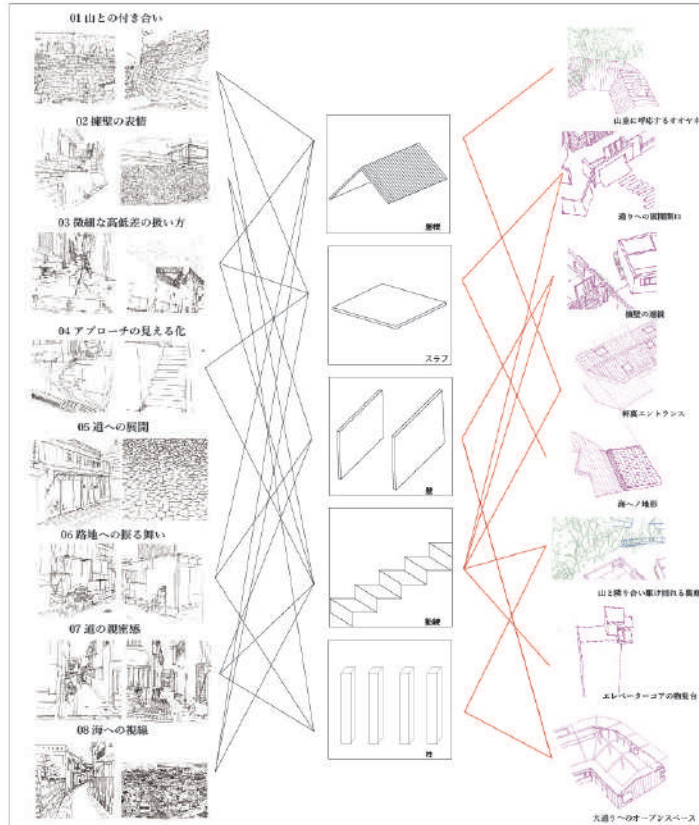
05 計画 景観研究と建築を結びつける新たな図式

一般的な大きな建築や、小さな街の特徴を集める建築では街の景観とは結びつかない

大きな建築をつくるのではなく、小さな街の特徴を集めるだけでもない、大きな建築を分解し、街の部分として結びつけることで、"大きな建築が街の景観に参加する事"を可能にし、また、街のアイデンティティを再構築する存在になるのではと考えた。

06-01 手法 一つの建築を「分島形式」と捉える（構成要素の生成）

得られた街の部分と建築を結びつける為に、ひとつの建築内の構成要素をバラバラに考えることを「分島形式」と捉えなおし設計を行う。建築の構成要素だけで考えるのではなく、街の部分に参加させることを前提に考える事で、構成要素はより複雑に分岐し個性を持つ。



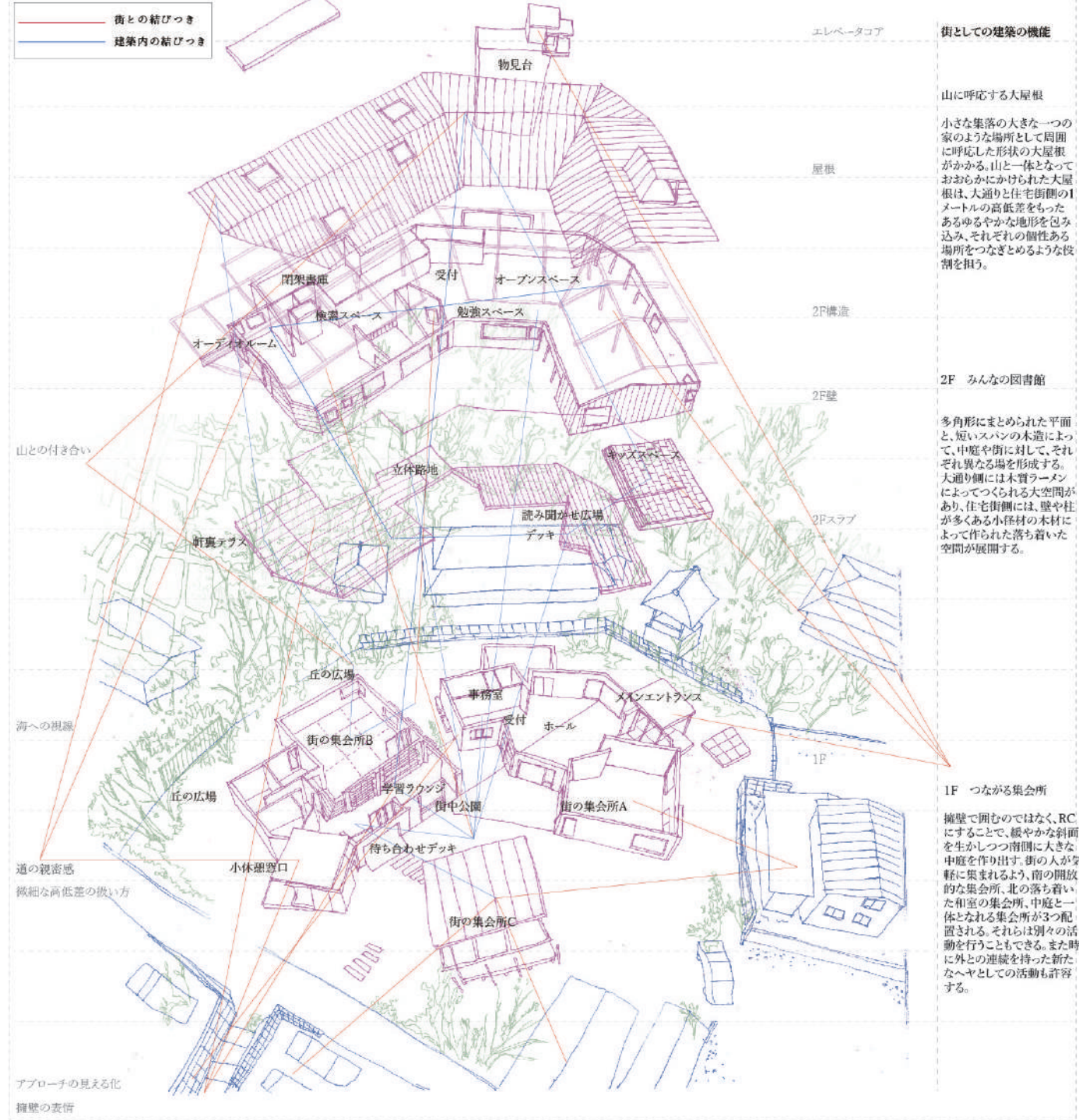
06-02a 手法 水平方向でスケールを横断する（街と建築の部分の複合）

水平構造は構成要素のスケールをそのまま反映するので、街を扱う設計に有用である。街の部分と建築の部分で水平方向で結びつけることで、街の異なるスケールがそのまま一つの建築にも表れてくる。山や路地、住宅と様々なスケールが同居することが街であるように、この建築の部分も異なるスケールが同居する（複合）。



06-02b 手法 垂直方向で多様なレベルを横断する（建築内での連続）

研究によって街での体験は、家庭というコミュニティから建築、街路と多様なレベルを横断しているものだと気づいた。街での体験がそうであるように、建築の中でも「分島形式」で考えられた構成要素を様々なレベルで横断させる。それらはシーケンスとなり、街の図式により近いものになると同時に、この場所のこの建築だからこその体験となる。



異なるスケールが同居する手法が建築にスレを生み出す

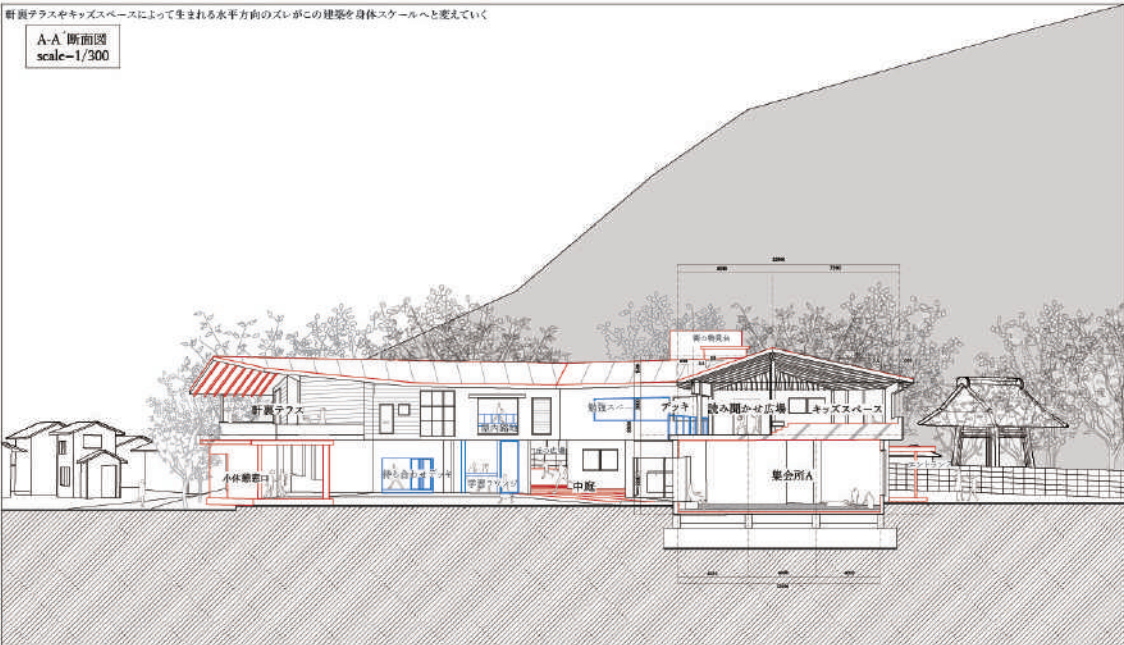


街の部分と大きな建築の部分が各それぞれ結びつけられていることで、大小様々なオブジェクトを生み出し空間を規定していく。それらのオブジェクトは、異なる場のスケールに起因しているため、それぞれにスレが生まれ、一つの建築に更に異なる場を生み出し、建築をより身体スケールに変えていく。

材料や素材の指定や部分の集積だけでは、そこに新たな場の発見や気づきはない。街を含めることで生まれる、異なるスケールが同居した手法によって建築内のずれを許容することは、初めて街を建築化するというのではない。

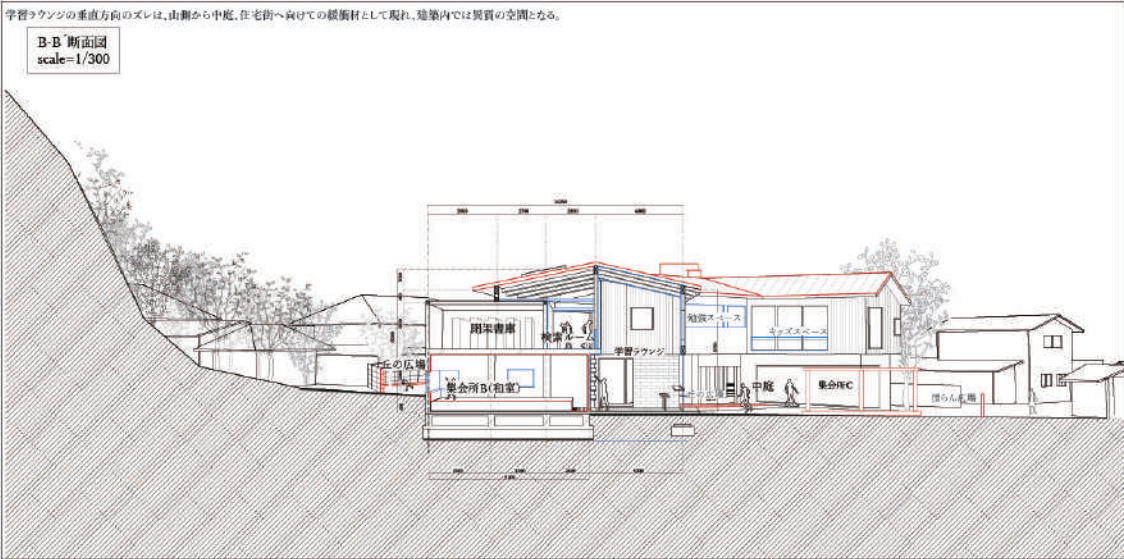
軒高テラスやキッズスペースによって生まれる水平方向のスレがこの建築を身体スケールへと変えていく

A-A 断面図
scale=1/300



学習ラウンジの垂直方向のスレは、山側から中庭、住宅街へ向けての視線材として現れ、建築内では異質な空間となる。

B-B 断面図
scale=1/300



大きな建築が街の景観に参加していく

敷地面積から得られるこの空間は、周りの小さな住居とは対照的だが、操作やスレによって身体的スケールを獲得する。景観に参加する新たな図式によって、街の顔としての大きな建築がこの街の人に愛される新たな街の一部となるだろう。



お寺からは高低差がほぼなく混ざる

薄暗かった路地からの町下空間を見上げる

突き出る軒、路地空間を規定する

住宅街側からは路地空間で展開する



中間地点は様々な視線が行き交う場

山へ向けて駆け上がる丘

ホワイエから大通りへ抜ける

スレが身体スケールを生み出す

学習ラウンジはこの建築で大きな構えとなる



海からのアプローチに連続する立面

多角形の平面に多角的に窓が開けられる

子供たちが大屋根の下を遊ぶ

物見台から大通りを見る

大通りに開放的な窓

親密感のあるスケール

街の中心として子供たちが遊びに来れる中庭